

避暑地南チロル

大 澤 元*1

【要 旨】 南チロルは鉄道交通の発達とともに避暑地として徐々に脚光を浴びるようになった。最初に訪れたのが貴族や文人墨客であった。旅人たちの中に二人の作家SchnitzlerとHofmannsthalがいた。今回は彼らの作品と南チロルとの関わりとを探る。前者は戯曲『遠い国』、後者はエッセイ『夏の旅』に、それぞれこの地を印象深く書きとめているからである。小論は歴史や地理、風土的環境を踏まえながら、二人の文学作品に現れた南チロルの自然、人、生活について考察するものである。

【キーワード】 南チロル、シュニツラー、ホフマンスタール、遠い国、夏の旅

プスター谷のヴェルスベルクに1907年の夏 Arthur Schnitzler (1862 - 1931) と Hugo von Hofmannsthal (1874 - 1929) がやってきた。表向きは避暑だったが、二人とも仕事をかかえていた。快適な気候と恵まれた環境が効果あったのか、創作活動ははかどったようである。かねてより旧知の間柄で仲の良い彼らは、お互いに示し合わせてここを逗留地に選んだのだった。ただし Hofmannsthal はその前にベネツィアのリド海岸で2週間を過ごし、引き続きドロミテの科尔ティナ・ダンペッツォに滞在したあとやってきた。ヴェルスベルクにはウィーンへの帰り道に立ち寄ったのだった。妻と3人の子供が同行していた。Schnitzlerの方はOlga夫人と6週間の予定でここに来た。

オーストリア・ハンガリー帝国のお墨付きを得て敷設された南鉄道が何の変哲もない牧歌的な山村を一変させてしまった。温泉付きホテルが開業し、ポーツェンやブリクセンの金持ち、果ては王室の一員までが滞在客となるに及んで、ヴェルスベルクはシックなところと評判になる。今でいう官主導のリゾート観光地のはしりである。快適な避暑地の条件として挙げた長所なるものが、およそ100年前に刊行された観光客向けパンフレットから一目瞭然である。それを列挙するの

も今となってはかえって興味をそそると言えよう。「女中部屋、ドロミテ連山の眺望可能なガラス製ヴェランダ付き、極めて良質な高圧水道、英国式最新トイレ等」、このくだりに往時の避暑地での暮らしぶりがしのばれる。現在では女中帯同など望むべくもないが、逆に今では当たり前の水道とトイレが当時は重要なセールスポイントだったらしいことが分かる。新しいエネルギー源の電気も魅力だったようだ。前年に営業を開始したばかりの電力発電会社がすべての宿泊施設と殆どの夏用別荘に電力を供給するのみならず、街路や広場を電灯で照らすという触れ込みであった。

当初の短期滞在の目論見は Hofmannsthal に良い方向で修正を迫ることになった。この地の風光明媚に加え、2~3年に一度訪れる熱病のように激しい創作意欲がつのってきたからである。執筆への殆ど狂おしいまでの欲求と構想中の作品のためにメモを残しておこうという思いが高ずる。とは言え生活に一定のリズムが必要だったのだろう。午前5時から8時までは毎日すがすがしい大気の中、彼は自らに散歩を課した。時にはブルネックあたりまで汽車に乗って遠出もした。

ある日 Hofmannsthal が訪ねたいと Schnitzler に申し出た。すると相手は、創作のためせっかく閑静なところへ引きこもったつもりなのに、と洩る。社交的

*1 長野県看護大学非常勤講師 (信州大学工学部教授)
2002年12月9日受付

で愛想が良く誰にも好かれたHofmannsthal, それに引きかえ重厚な書齋派で懐疑的な思索家Schnitzler, 両者は互いに尊敬しあうものの、生活スタイルまで必ずしもぴたりと合ったわけではなかった。ましてここは本拠地ウィーンを遠く離れた旅行先である。結局Hofmannsthalは、12歳年長の先輩作家に、勿論仕事の邪魔をするつもりはない、自分も仕事をしている、と言って安心させなければならなかった。その日Schnitzler家(別荘)を訪れたHofmannsthalが、Olaf夫人のいれてくれたコーヒーを飲み終わると、そそくさ退散したのは想像に難くない。

ヴェルスベルク体験が動機となったかどうか定かではないが、それから4年後の1911年Schnitzlerは戯曲『遠い国』で南チロルを舞台に選んだ。ここに先に述べたような豪華リゾートホテルが登場する。ただしそれは全5幕のちょうど真ん中第3幕目に嵌めこまれており、主要な舞台はウィーン郊外バーデンの別荘となっている。分量的にもバーデンでの出来事が全体の5分の4を占める。そのためだろうか、劇が終ってみると第3幕があたかも一場の夢のように感じられる。当時ウィーンの人々の間で南チロルはドロミテの名で親しまれており、ここでもその呼称が使われている。ドロミテは本来この地を探索したフランス人地質学者の名に由来するといわれるが、一風変わったその響きは人々に容易にあれらの奇怪な山塊を連想させ、未知なる世界への憧れを掻き立てるに十分な効果があったようである。現在厳密に定義するとドロミテは南チロルの総称ではなく、アルトアディジェ州のほぼ半分、即ちアイザック川とエッチュ川を結ぶ線の東側全域、さらに隣のヴェネト州コルティナ・ダンペッツォ周辺やピエヴェ川上流をも含んだ広範な地域を指す呼称なのである。19世紀末までにヨーロッパのほぼ全域を網の目状に張りめぐらすのに成功した鉄道交通の発達は、一般大衆の間に旅行を手短なレジャーとして浸透させ、ひいてはアルプス地方へのハイキングや登山に対する関心を徐々に高めつつあった。そうした時代の雰囲気ですでに戯曲『遠い国』第3幕でもうかがうことができる。ただ『遠い国』では鉄道がまだホテルの所在地まで来ていなかった。数年後にやっと敷設される予定となっている。高所ゆえに難工事の上、莫大な費用を

要する国家的事業だったのであろう。そのため近々この件でホテルの支配人がわざわざウィーンに赴き大臣に直談判に及ぶという。顧客の一人にそうポルティエ(接客主任)が漏らす場面が劇中に設定されている。

『遠い国』は1911年10月14日、ウィーンをはじめヨーロッパの主要9都市、ベルリン、ブレスラウ、ポッフム、ハンブルク、ハノーファー、ライプツィヒ、ミュンヘン、プラハで同時に初演され、成功を収めたといわれる。同時初演?映画の同時封切なら今日我々にも馴染みがある。芝居の場合はどうだろう。さぞかし周到な計画と準備が必要だったに違いない。映画が芝居に取って代わり隆昌期を迎えるまでにはまだ少く時間を要した。演劇はオペラと並んで依然時代の花形であった。むしろ文化の担い手として爛熟期さえ迎えていたのである。なお同じ1911年にHofmannsthalが台本を書きRichard Strausが作曲したオペラ『バラの騎士』がドレスデンで初演されている。この時ベルリンからドレスデンまでオペラ観賞のため特別列車が仕立てられたという。古き良き時代をしのばせるエピソードである。ただし第一次世界大戦勃発のわずか3年前のことである。オーストリア・ハンガリー帝国崩壊が目前に迫っていた。それだけにいっそう『遠い国』にハプスブルク帝国末期の匂いが色濃く反映しているのを感じずにはいられない。華麗で頹廢したどこか危うい雰囲気をかもし出す落日間際の都ウィーン、そこに群れつどう人々の繊細この上ない心の襞を描き出したこの作品は、初演より90年以上経た現在でもたびたび上演される人気芝居である。

劇の主役は初老の資産家工場主Friedrich Hofreiterである。それ以外の人物はそれぞれ社会的制約を帯びて登場するが、役柄はすべて主人公に有機的に関連づけられるべく配慮されている。Hofreiterの友人、名うてのピアニストKorsakowが自殺する。Hofreiterの妻Geniaが彼の恋情を拒絶したからである。妻がKorsakowの恋人だったのではないかと疑うFriedrich。その一方で彼はGeniaが貞節を重んずるあまり友人の生命に対して配慮を欠いていたのではないかと思う。妻に対する嫉妬心にも拘らず、彼自身は貞節にあまり重きをおかぬ人間なのである。第3幕は南チロルに場所が移される。山行を機に、彼は若い

奔放な女性Ernaと関係を持つ。その間海軍少尉のOttoがGeniaの恋人になる。Geniaは夫の南チロル旅行には同行せず、家に留まっていたのである。HofreiterはErnaとの情事のあと一人で旅から帰宅する。そこで彼は妻GeniaとOttoの関係を知る。テニスに興じたあと、取るに足らぬ口実から彼はOttoに決闘を申し入れる。Ottoが倒れる。Hofreiterは確かな未来のないまま生き延びる。

表題となった言葉はOttoの口から発せられる。彼はまだ人生の門口に立ったばかりの青年である。海軍少尉として彼は近々海のかなた「遠い国」へ赴くはずであった。しかし運命のいたずらが彼を任地に向かわせない。それどころか決闘であたら若い命を散らしてしまう。彼の前に開かれていた洋々たる未来はかくもあえなく消失し去るのである。決闘—この不埒なアナクロニズムに男たちを駆り立てたのは一体何だったのか？観客はそこに時代の病を読み取る。劇は生きる希望を遠く彼方へ先送りして進行する。Hofreiterはじめ登場人物は皆、頹廢した社会の只中に浮遊することはあっても、そこから脱出できない人々なのである。

だが一見軽佻浮薄に思われる彼らの行動には、ある種の必然性のようなものが認められる。何かを胸の奥に秘めながら、彼らは行為に向け確然と一步を踏み出していく。今の今を生き切るひたむきさゆえに、彼らの立ち居振舞いは澁刺としており、極めて魅力的である。登場人物がいささかも類型的でない。長所と欠点を併せ持ち人間味たっぷりの人々、その一人一人が誠に個性的である。一旦口を開くと機知や洒落、ユーモアが次々に飛び出す。またそれに対する当為即妙の応酬がある。会話が会話を呼び、人の群がるところに団欒が生まれる。かくして観客は洗練された社交を目の当たりにすることになる。世はまたマイ・カー時代が始まったばかりであった。現在なら映画でお目にかかるはずのドライブ場面も劇の中で立ち会うことになる。これに散策やテニスなどの身体活動も日常生活に加わってくる。テニスに興ずる彼らの姿は、21世紀を生きる私たちの身近に、そのまま移し置いても遜色ないくらいモダンかつ新鮮である。ここで第3幕、南チロル豪華リゾートホテルでの一場面をお目にかけることにしよう。

Meyer: (しばらく待ったあとで) ポルティエさん。
Rosenstock: (愛想良く、だが幾分余裕なくもな
く) 何でしょう、先生？

Meyer: 質問したかったのです、ポルティエさん。
実は明日山歩きする計画なのです。ホーフブラ
ント小屋までガイドが必要かどうかお聞かせ願
いたかったのです。

Rosenstock: おや、先生、全く心配いりません。
道を見失う恐れはございません。ちゃんと目印
がついています。

Meyer: そのあと小屋からどこか頂上へ行く時
は？例えばアイグナー・トゥルムへは？

Rosenstock: (ほほえみながら) アイグナー・トゥ
ルム？ここはこのあたり一帯で最も困難なルー
トです。極めて稀にしか試みられません。抜群
の体力があって高所恐怖症でない登山者にのみ
開かれています。今年は目下のところ行った人
はいません。

Meyer: 失礼、私が聞いたかったのはアイグ
ナー・トゥルムではありません。(地図を指し
て) ロートヴァントのことです。そこはそれほ
どひどくはないでしょ？

Rosenstock: 全く心配いりません。どんな子供
でも登れます。

Meyer: いまだ決して事故はなかった？

Rosenstock: ええ。時としてロートヴァントか
らも転落する人はいますが。

Meyer: 何ですって？

Rosenstock: 山も例外ではないのです。当節い
たるところにディレッタント(素人)がはびこっ
ていますから。(Schnitzler, 1991: p.59)

登攀困難なピークには敬意を表して往々初登頂者の
名が刻まれることがある。劇中で話題の山頂アイグ
ナー・トゥルムは、今はリゾートホテルの支配人にお
さまった男の名前にちなむ。彼は傑出した登山家なの
である。若かりし頃その彼が一人の女性と恋に落ちた。
二人に一児が授かる。この子がOttoである。だが二
人にやがて破局が訪れる。妻はのちにウィーンで名女

優の誉れを不動のものとする。成人した息子は先に述べたように海軍少尉となって遠い国へ向け今まさに旅立つ日を迎えようとしている。この間に20年の歳月が横たわっている。その歳月の長さが今はホテル支配人 Eignerに昔の思い出を語らせるのである。山頂に立ったのは実は妻と別れて程ない頃だったと打ち明ける。

Eigner: 死に場所を探していたとまで主張するつもりはありませんが、死はより手近なところがありました。当時の私にさほど生は重きが置かれていなかったのです。神の審判のようなものを仰ごうとしていたのかも知れない。

Friedrich: こういう場合に夫という夫が皆岩壁によじ登ろうとしたら、ドロミテは滑稽な眺めを提供することになりましょう。でも他の連中に比べてあなたのなさったことはましでしたよ。(Schnitzler, 1991: p.77)

劇はアイグナー・トゥルムを実に巧みに使い分ける。一方にはそこが愛する者との別離を想起させるのに引きかえ、他方には愛の成就の場所と化している。その鮮やかな対比! Eignerにとっていわば愛の墓場に等しいのに対し、Friedrichには生がますます華やぐ場となっている。彼はErnaとともにこの難ルートに挑み登頂に成功する。二人は親子ほど違う年齢差をいささかも意に介さない。精神の若さと冒険心とが敢えて死と隣り合わせの危険に駆り立てるのである。しかしEignerは人間の心の不可思議さについてこう述べる。

Eigner: われわれ人間がその奥底にいかに複雑な自己をかかえているか、あなたはまだお気づきでないのでは? 多くのものが同時にわれわれに内に巣くっていることか。愛と欺瞞、誠実と背信、一人の女性への崇拜と他の女性、その他の女性たちへの恋慕。われわれはたしかに心に秩序を築こうと試みる。出来る限り巧みに。だが秩序は所詮作りものにすぎない。自然はカオスなのです。Hofmeisterさん、魂は詩人がかつて表現したように広大な国なのです。そう言った

のは詩人でなくホテルの支配人だった可能性もある。(Schnitzler: 1991: p. 78)

ドイツ語の「遠い」(weit)は、広大なという意味も持ち合わせている。Ottoの父は人間の魂を広大な国にたとえる。そしてそこに個人では律しきれない巨大な力、カオスが介在するのを見る。彼は人間の徳育の可能性についてはなはだ懐疑的である。彼にとって文化、文明なるものはただの薄い表面にすぎぬのであって、それはいつでも地下の破壊的な衝動によって突き破られるものなのである。事実Hofmeisterはのちにこのマグマに翻弄され、人間の尊厳を放擲し、獣性の虜(とりこ)になってしまう。Eignerの危惧が的中したのである。かくして戯曲『遠い国』は観客にもう一つ別の視点からの洞察を迫っているのである。ひょっとすると過去1,000年に及ぶ営々たる努力を一撃のもとに無にし、ヨーロッパを根底から揺さぶることになったあの危機的状況、第一次世界大戦をも予言しているとさえ言えるかもしれない。ここには自ら医者であり、その卓越した心理描写によってかのFreudをして舌を巻かせたと言われる作者Schnitzlerの世界観が投影されていると見るべきだろう。精神を習俗や伝統、慣習などが律してきた時代はとうに終わりを告げ、個が自由を謳歌する新しい時代が到来しつつあった。しかし制約を脱した近代的自我が、そのままただちに願わしい幸福を手繰り寄せるとは限らない。むしろ早過ぎた獲得を前に、不安の方が先に立ったのではあるまいか? 不安でなければ焦慮だったかもしれない。他のSchnitzler作品同様、『遠い国』でも愛欲と死がテーマになっている。信が置けるのはただ現在のみ、刹那はそれが強力で貪欲、かつ雄々しくあればあるだけ価値がある。そう考える人々の生活が描かれるのである。

二人の作家がヴェルスベルクに滞在する4年前の1903年6月19日から7月1日にかけて、Hofmannsthalはドロミテを旅行したことがあった。この時はコルティナを経由しアンペツォ谷をくだつてヴィチェンツァまで行き、帰りはスガナ溪谷を通過してブレンナー峠に出た。その17日後、7月18日の

ウィーンの新新聞《ノイエ・フライエ・プレッセ》に、彼のエッセイ『夏の旅』が掲載された。全行程のうち前半部のみを扱っていたが、この旅の印象を記したものであった。旅から戻って間もなかったこともあって、エッセイにはドロミテの自然と風物が、まるでもぎたての果実のように新鮮に書きとめられている。周知のごとく Hofmannsthal の体内にはイタリアの血が流れこんでいる。祖母がロンバルディアに城館を持つミラノ公国の貴族出身だったからである。南の風を受けると、この血液がとたんに反応し始めるのだろうか？ウィーンの人々は彼の流麗典雅で匂い立つような文章に接してドロミテへの旅心を大いに掻き立てられたことであろう。ドロミテと言ってもここでは広義の意味である。高い山と深い谷のみならず、アルプスからアドリア海に向かってせり出た露台のような地域をも含んでいる。彼によればそこはいわばマントのようにアルプス山脈の腰から海まで裾を引いた国だという。また立ち並ぶ都市の美しさにかけては地上のどこよりも豊かだと断言する。マントの縁には三つの豪華な留金がついている。すなわちヴェネツィア、ヴィチエンツァ、ヴェロナの3都市である。そのみならず麓の中にもさらに金細工が隠されていて、すみずみ隈なく探せば宝がまだまだ見つかるというのである。たとえばベルノ、この裾を下りて行けばトレヴィーソであり、分岐する道の先はヴィットリオである。だがその西方のフェルトレ、アソロ、バツサーノを忘れるわけにはいかない。かくしてエッセイ『夏の旅』は、王侯のような風土に宝石を散りばめた如く点在するこれらの都市名がそれぞれ偉大な画家や建築家と結びついていると指摘し、著名な代表としてカステルフランコの画家 Giorgione (1476/78頃-1510)、ヴィチエンツァの建築家 Andrea Palladio (1508-80) を取り上げるのである。二人の偉大な芸術家に立ち入る前に、今はドロミテについて述べたくだりを引用してみよう。

初日の行路は山中の道だった。山の中に白い街道が切りこんでは進み、その下をはげしい川水が猛り下ってゆく。村落は街道と天の中間に懸っており、雲雀はここから空にのぼって、目くるめく高空から歌っている。空の上では、何人か両親の

墳墓のもとに佇み、丈低い墓所の塀の上にかがみこんで、雲雀を足もとに見下しているのかもしれない。そして村々は街道と激流のあいだに懸り、教会の塔の尖についた金塗りの天使は、はるかに低い深みから、その閃きを上に投げ上げてきた。

街道のわきにはいくつも美しい泉がある。ある石柱からは、四筋の水流が、美しい、きわめて古い石の水槽に流れこんでいる。どの水流も頂で、雪と陽光を溶かして飲んでいる山塊に向って挨拶しているのだ。そして老若の女が、狭い難儀な小径をのろのろと、上の村々からおりてきたり、下の村から上ってきたりする。どの女も肩の上に、中膨れの、きらきら光る銅盤を二つそなえた古代風な天秤棒をかついでいる。そして彼女らが泉のもとで盤に水をみだし、どくどく音を立てて水が注ぎこまれるとき、二つのものが再び合体するのだ、いっしょに幽暗な山塊の胎内に睡っていたもの、すなわち水と鉱物とが。(高橋, 1972: p. 327)

俗に山の斜面に張り付いたような暮らしと言うが、ここではそれに天地の間をのぞく深い谷が加わる。遙か足下で泡を噛む水流には、弧をえがいた橋がかかっており、太古の昔をしのばせる石橋の胴には、水滴のしたたり落ちる苔がむしている。人間のなせるわざでありながら、自然がそれを領有してしまった観がある。一方の山腹からせり出して、渓谷を越え、対岸の山腹にふたたび根を下そうとするかの如き趣のためである。渓谷は渓谷につらなり、水は水流の中に落ち、小径と橋は村々を結び、山羊飼いの小屋からは、山道が下りになって、永劫の滝がかかり、陰湿な緑の茂みにつつまれた水車小屋へと向かっている。山巔には鷺が巢を営み、風は遙か彼方からやってきて、鐘の音を吹き上げたり吹き降ろしたりしている。思うにこれはただの渓谷以上のものである。これは一つの国であり、その美は空をゆく大きな雲にも似ている。重畳と幽暗とに充たされ、しかもなお光輝を放っている雲、上辺は金色いろの霧となって融けている雲である。雲の縁辺の入江が美しく融けたように、この国の名もまた美しい。この国をカドリンという。

カドリンの名は現在のピアヴェ河畔の町カドーレに

起源を発すると考えられる。このカドーレこそヴェネツィア派絵画の巨匠 Tiziano (?-1576) の生れ故郷であった。彼は少年時代にカドーレからヴェネツィアに出て Giovanni Bellini に学び、次いで Giorgione に接触した。ドイツ人商館の壁画では彼と共作もした。Giorgione の死後は、残された未完成の遺作を完成するなど、彼の影響を強く受けたという。『夏の旅』で Hofmannsthal はルーヴル美術館所蔵の Giorgione の絵画《田園の奏楽》に言及したと永らく考えられてきた。近年の研究では絵画は Giorgione より Tiziano の加筆の方に比重を置く説が有力である。とは言え Hofmannsthal の時代は Giorgione の作とされていた。それはさておき二人の芸術が似たような自然環境から生まれてきたことに変わりはない。ただ Giorgione の故郷は Tiziano のそれよりさらに南、海と山の中間地点に位置し、アドリア海に向かって露台のようにせり出た町カステルフランコにあった。

かかる風土に Giorgione が生まれたのではなかったか？ Hofmannsthal はそう問う。彼によればそこに生をうけた者たちは風景のいわく言いがたい愉悦を味わって育つ。山なみへの見晴らしや、丘の末端での憩いを己が内部に吸収した彼らには、その結果自然の名状しがたい魅惑に匹敵すべくこれと似たようなものを自ら創造しようとする意欲が湧く。それもこれも遠近、明暗、白昼と夢の甘美な渾融を、幼少時から果物のように吸いとったがためだというのである。かように彼らの芸術は生まれ育った風土と不可分に結びついているのである。

そして山々から発した奔流も、教会や城堡のまわりを穏やかに流れ、崩れおちた壁を映し、水音もたてず走って畑また畑を流れすぎ、村落には沼を残し、公園には池を与えている。そうして平和な沼や、大理石で周囲を築いた池は、いともしめやかな夕べには、紺青の巨峰の濡れた吐息に養われ、大きな艶やかな入江を持った、はるかの金ぶちの雲を映し出すのである。池は立ち並ぶ立像やヴィラのバルコニーを映すと共に、開放された堂宇の屋根を蔽う梁を、そのおもてに映している。この梁というのは木立だった。池が噴泉をなして

いるところでは、木立は生命であり、その頂きは、根の中から迅速な水が湧き出す勢よりもはげしく、ざわめき鳴っていた。かくしてここではじめて、山々のはげしい衝迫が、至幸の安息に融けこんでいるのである。(高橋, 1972: p.329)

この場所の奇蹟は Hofmannsthal によれば諧和の精神のなせるわざであるという。大地と雲、遠景と近景、昼と夢、ここではそれが一なる世界を作る。大気は、歡喜の流れが音もたてずに流れこむ水盤のようである。こうした風景にこそ音楽が相応しい。叢林の木陰でラウテを奏でる者がいる。傍らには楽の音に合わせる素朴な歌声。聴き入る者の何という至福。張りわたされた弦のアコード。それは魂の中で融解し、魂の深淵に落ちてゆく。小さな雲が青紫色した内部からの灼熱に輝いている山なみの斜面に融け去ってゆくように。

女たちは衣服を草の上に脱ぎすてて、その裸身を大気の二つの息づかいに委ねている。大気は、一方で、彼女らを影の予感をしのばせながら冷え冷えと、山なみの奥へ吸いとろうとしながらも、他方、平地の生温かさと豊饒の中で、彼女らの軀身にたわむれつつ舞い上ってゆく。しかし彼女たちの素足は、草地や花の間を掻き分けながら、湿った、涼しい地表を感じ、地の中に根を張ってゆく幸福を感じているのである。そして彼女たちは、石づくりの泉の上に身を折りかがめて、地底からその暗い秘密を捲き上げようとするかのように、水に濡れた井戸の底から桶を手繰りあげる。しかし彼女らが汲み上げるものは、澄んだ水ばかりだ。それでも彼女らはその水を飲み、それが五体を涼しく流れめぐらぬるのを感じ、地下の涼気のなかをころがってゆく何かニンフの悦楽といったものを感じるだろう。(高橋, 1972: p.329)

Hofmannsthal がわれわれに提示しようとしているのは、肉体の持つ官能的な魅惑よりも、Giorgione 芸術が達し得た不朽の美そのものなのである。女たちの仕草に人間らしさが影をひそめ、どこか天上的な風情

が纏わりついているのはそのためだろう。彼女たちは世俗の塵埃を離れた、どこか神話的な世界に移行しつつあるかのようだ。ところで男たちは泉のそばにたむろしている。彼らは衣服を着ている。大気のため息は捲毛のかすかな影をさした彼らの頬にほんのり触れる。また男の一人がかぶるエメラルドがかった緑のベレー帽に附着する白い綿毛とたわむれる。はるか後方の遠く青味がかった山なみのあいだでは、輪翔する鷺が胸毛を見せて白銀色の雲影の入江の中を舞ってゆく。ベレー帽の男は彼方に青々と聳える遠景の山々をまじまじ見つめている。彼にはその眺めの方が、濡れて冷たい石の泉の縁にゆたかな裸身をのせて坐っている女たちよりも美しく思われるのだ。遠方の感情を味わいつくす方が甘美なのである。女たちが近景を享受していると同時に、こうして男は遠景を享受している。

ルーヴル美術館の《田園の奏楽》には二人の男女が描かれてはいるものの、男が遠景に見入るような場面は何ら見当たらない。二人の男は奏楽に興ずるのみである。女の一人もフルートを手に持ち奏楽に加わっている。もう一人の女はたしかに井戸から水を汲みとってはいるが、泉の縁に坐ってはいない。立ったままである。右手は井戸の縁で前かがみの上体を支え、左手は水を入れたガラス瓶を持っている。4人の男女の背後には、大樹のもと帰途につく羊飼いの姿が見える。中景に二つ建物らしきものが見えるにも拘らず、『夏の旅』に記されたような四阿やバルコニーとはにわかには判じがたい。そこに掛けてあるはずの緋色の毛布も見受けない。絵画全体に黄昏時らしい雰囲気がかうばかりである。

Hofmannsthalがエッセイ『夏の旅』のこの場面で説きたかったこととは何なのか？たぶんGiorgioneが始め、Tizianoが完成した風景と人物の一体化する理想的な絵画世界の究明だったのである。その手がかりとして《田園の奏楽》に着目した。それにも拘らず絵画自体にとらわれる必要は全く感じなかった。しかし絵画の有するあまりにも豊かな詩情がHofmannsthalにおそらく別の情景をすら透視させてしまったのであろう。ひときわあでやかでありながら絶妙に調和のとれた色彩によって生まれたGiorgioneの田園風景は、それ以前の絵画作品のように付随的な背景として扱わ

れるのでなく、作品の主要素となり、風景画の先駆をなしたといわれる。風景画誕生のこうした秘密を探ることこそ『夏の旅』の目的なのだった。

カステルフランコを過ぎると、白い街道は庭園をめぐるした塀のあいだや、桑の木々のあいだをなお静かに下ってゆく。まだすっかり鎮まりきらない穏やかな衝動が、旅を平地へと駆り立てるかのように。だが必ずしも平地に向かっているばかりではない。滑り降りる山なみの最後の波が凝固し丘陵をなすところがある。その麓に数多くの宮殿を擁するヴィチエンツァの街が横たわっている。宮殿の建造者は丘陵に登り、丘陵の円い頂が風景の冠であることを見届け、丘陵にかぶせる冠として、彼が夢見たものなかで最も美しいものによって飾ることにした。これがPalladioのロトンダ（円頂閣）である。

これは住居ではない。寺院でもない。しかし同時に両者でもある。それはたった一つの、巨大な、まるい広間であって、円天井で蔽われ、四つの扉が、それぞれ階段によって外部に流れ出る四つの玄関に接している。この円頂閣の壮麗には何もかも敵しえない。この大きく清らかな全体を支えている支柱の中に、アーチの中に、いくつかの小部屋がつくられている。またひそかに円頂閣を鉢巻状に取巻いた小部屋があり、円天井の下で高い広間につらなっている。四つの吹き曝しの階段の下にも小部屋があって、格子をはめた窓の奥から、この壮麗を重荷として頸にのせている奴隷のように、外に陰鬱な眼を向けている。（高橋、1972：p. 331）

これよりおよそ120年前Goetheがヴィチエンツァを訪れている。この時GoetheはHofmannsthalとは反対に西のヴェロナ側から入り、早速その日のうちに市内でPalladio作のオリムピコ劇場その他の建造物を見物した。その時点ですでにGoetheはPalladioについてこう述べる。（Goethe, 1967: p.52）彼は真に内面的に偉大な、そして内部から偉大さを発揮した人間だった。この男が近代のすべての建築家と同じく打ち勝たねばならなかった最高の困難は、市民的建築術に

おける柱式の適切なる応用なのである。つまり円柱と
囲壁とを結びつけることは一つの矛盾にほかならない
からだ。ところがかれはこの両者を見事に調和させた。
その作品は目のあたりにすることによって畏敬の念を
おこさせる。彼の設計には事実何か神的なものがある。
それは真と偽とから第3のものを形成し、そのものの
仮の存在がわれわれを魅惑する、あの偉大な詩人のも
つ特殊能力とまったく同じものである、と。Goethe
のロトンダ訪問はこの2日後のことであった。

この指摘をHofmannsthalは知っていたと思われる。
ロトンダについて彼が次のように言葉を継いでい
るからである。

これは死を免れぬ人間のためのものではなく、
神々のために建てられたかのようだ。だがこれを
創ったのが人間であるからには、彼らはこの住居
に耐えていくために、その脈管のなかに、何か
神々の黄金の血液といったものを、持っていたに
ちがいない。ここにおいて人間を超えたものの出
現を要請しているのは、山々、海、平地、そして
都市に向ったその四つの階段である。(高橋、
1972: p.331)

ロトンダ見学に際してGoetheが主として建築学的
な特徴に興味を示したのに対し、Hofmannsthalは
もっぱら建造物が彼自身の内面に喚起した光景ばかり
を書きとめる。4つの階段がお互いに何も知らず背を
向けていること、しかもそれらが仄暗い巨大な奥の広
間にすら背を向けているがために見入る者に恐怖を催
させると語り、かつてどれかの階段の最上端に一人の
戦士、すなわち恐るべき破壊の神が立ち、下の都市に
向って、焰の狼煙を上げたかも知れぬと思ひ描くので
ある。また海に面した別の階段の上では、人間を超え
た悦楽の跳梁を夢想する。ファウヌス神のごとくそれ
はよろめき出て、互いにもつれ合いながら、もろ手は
酔いしれ、髪は口づけと葡萄酒に濡れて、押し潰した
葡萄の液が星々のもとへ飛び散ってゆく。第3の階段
では若さと恐怖におののきながら、星々や巨峰の黙し
た影に向って祈る孤独な一人の男を思い浮かべる一方、
第4の階段では一転して殺人場面を想像する。

Hofmannsthalの紀行が普通の意味での旅のドキュ
メントでないことは訳者高橋英夫氏がすでに指摘して
いる。(高橋、1972: p.428) それによれば、風景と心
象が互いに呼応しあい、喚起しあって生ずる精神の運
動がHofmannsthalの旅の姿なのだという。しかし
彼が内部の眼を以って透視する外部風景は、個別的な
その一瞬一瞬の相の彼方に、土地の聖霊を認めるに
至っている。それでありながらそれは土着的な珍奇な
ものとか、土地の名所名産といった因子を少しも混入
させない。民俗学的、あるいは民族学的因子を完全に
排除した地霊なるものも存在し、それがわれわれの心
の一隅に棲みつこうとしていることを、かすかな衝動
と共に気付かせてくれるのがHofmannsthalの紀行
だというのである。

たしかに彼は通常概念での歴史には関心がなかつ
た。むしろ歴史を超えて生成するものに親炙した人で
あった。その結果われわれの眼前に仮象と幻想、感覚
と空想の織りなす謎めいた群像が立ち現れることにな
る。破壊の神やファウヌス、星々や山々と向かい合う
孤独な男、はたまた殺人場面など、それこそ彼が招来
した土地の聖霊もしくは幻視だったのではないのか？
Goetheがいみじくも先にPalladioに認めたものを
Hofmannsthalにも見届ける思いがする。すなわち真
と偽とから第3のものを形成し、そのものの仮の存在
がわれわれを魅惑する、あの偉大な詩人の特殊能力で
ある。ロトンダに現出する聖霊も幻視も、そのたぐい
稀な詩人の魂から産み落とされたものではなからう
か？

しかしいま、その建物の扉は閉じ、広間は睡っ
ている。かなたの円頂閣の額の輪にある彫像は、
破損し、日に灼かれ、手を切りおとされて、今や
ふたたび石塊に帰し、苔を求めているのである。
自然がその所産を奪いかえすのだ。自然はパラ
ディオをこの高みに駆け上らせ、ここから平地、
海、山々、都市を、陶然たる視線でその心の中に
吸いこませ、この妙なる風景に冠する丘陵を、彼
の夢をもって飾らせたのだ。前者が、荒涼たる外
界のなかに、彼の胸内の憧れを発して、天使たち
が上り下りする梯子を夢見たとすれば、後者は、

ここで彼の内心に溢れみなぎるものに促されて、この超人的な、円天井をかぶった広間と、王者のように大風景の四つの壮麗へと降りてゆくこの四つの階段を、夢見たわけである。(高橋, 1972: p. 332)

この地上にあるすべてのものが移ろう。ロトンダもその定めを免れない。かつてファウヌスの神のフルートに淨福が息を吹きこめたように、自然はPalladioの夢の中に、勝利の叫びを吹きこんだ。その自然が今、牧人の笛をかたわらに放置し、それを池水のほとりに朽ちしめる。ひそかにも、また力づくで、自然はロトンダを人間の建物という環の中から取り出し、仄暗く活動し続ける己の領域に引き込んだのである。Hofmannsthalは言う。ヴィチエンツァの丘に冠しているものは、もはや寺院ではなく、住居でもない、そのいずれをも超えたもの、不滅なる夢なのだ。

人は去り物もまた潰えていくが、かつてこの丘に建造者が立った事実は残る。そして彼の脳裏を掠めた思いや企ては数世紀を経た今、追慕する詩人の胸裏に蘇り新たな生動を期していつか再び実を結ぶ日を夢見る。Hofmannsthalにはこの種の伝承を心底から信じていたふしが見受けられる。創作活動の初期から中期への移行期に書かれたエッセイ『夏の旅』にもそれを予感させるに十分なものがある。この箇所もまた然りである。Schnitzlerがこの世界の没落の危機をあるがままに示すことで満足し、何か出口を見出そうとしなかったのに対し、Hofmannsthalは一つのより高次の調和と、新たに打ち立てられた文化的総合の理念とを提示し、その危機を克服しようとするあらゆる手段を尽くして試みる、そう評した碩学がいた。Ckayduio Magrisである。(Magris, 1966/ 鈴木, 藤井, 村山, 1990: p. 307) 敬意をこめ卓見に賛同したく願うものである。

文 献

Goethe JWvon (1967): *Italienische Reise*. Ed. Trunz E, *Goethes Werke Bd. XI*. Christian Wegner Verlag, Hamburg.

Hofmannsthal Hvon (1907)/ 高橋英夫 (1972): 夏の旅. 川村二郎, 富士川英郎, 岩淵達治他編, ホフマンスタール選集 2. 326-332, 河出書房新社, 東京.

Magris C (1966)/ 鈴木隆雄, 藤井忠, 村山雅人 (1990): *オーストリア文学とハプスブルク神話*. 書肆風の薔薇, 東京.

Schnitzler A (1991): *Das weite Land*. S. Fischer, Frankfurt am Main.

高橋英夫 (1972) 解説. 川村二郎, 富士川英郎, 岩淵達治他編, ホフマンスタール選集 2. 413-429, 河出書房新社, 東京.

【Summary】

South Tirol as Summer Resort

Hajime OSAWA

Shinshu University

With the development of modern railway transport South Tirol became one of the most popular summer resorts in Europe. Among the first to visit the region were the nobility, writers and artists, including men of letters, Arthur Schnitzler and Hugo von Hofmannsthal. In his Drama “Distant Land” Schnitzler wrote about the hotel life of those days in this summer resort, while in his essay “A Summer Journey” Hofmannsthal described the district and its beautiful landscape with reference to the painter Giorgione and the architect Palladio. The present essay attempts to consider the relationship between South Tirol and the works of Schnitzler and Hofmannsthal.

Keywords: South Tirol, Schnitzler, Hofmannsthal, Distant Land, A Summer Journey

大澤 元 (おおさわ はじめ)
〒390-0867 長野県松本市蟻ヶ崎台18-14
本学非常勤講師 (信州大学工学部教授)
0263-35-1692 (Fax 兼)
Hajime OSAWA
Part-time Instructor of Nagano College of
e-mail: yh-osawa@mvp.biglobe.ne.jp